

「わたしの戦争体験」戦後50周年に寄せて

福岡市東区 野上 三弥子

私は昭和14年生れですから、私の戦争体験は、終戦までのわずか1ヶ月半でしかありませんでした……。というのは、当時在住していた山口県下関市が空襲を受けたのが、終戦前の昭和20年6月29日のこと。

私が6歳の誕生日を迎える前でしたから、父を18年12月に現在の北九州市八幡の戦地へ送り出した母は、まだ29才の若さで、長女の私を頭に4才の弟と1才半の妹を抱えながら、現在の下関駅前で小さな旅館をやっていたのです。

その日、夜の闇だけでも怖い子供心に、母の緊迫した「防空壕へ」の声！。黒い建物の重なった上空は火のように朱く、空襲警報のけたたましいサイレンの中を、体中を恐怖で包んだ近所の大人達が我先に防空壕へ走る仲間に、いつの間にか分厚い防空頭巾をかぶっていた私たち母子も加わりました。

幼い頭に刻みつけられたB29の爆音に頭上を仰ぐと、黒い機影から何やら黒い固まりが、ポトポトと降って来るのが目に入り（ずっと年月が経ってから、これが焼夷弾だと教えられた）その度に朱い空が大きくなっていくような気がしました。

一つだけ幸いなことに、戦災を免れて今も残る大歳神社の高い石段下で、我家の広い敷地内に防空壕の入口があったから、戦地の父の祈りと共に、今日ある母子6人の健在があるのでしょう。

当時の八幡製鉄（現在の新日鉄）を守るべく、八幡陣の原から黒崎へ、黒崎から鹿児島島の戦地へ移った父から、「下関は危ないから、早く後藤寺（田川市、祖母の郷里）へ疎開せよ！」と何度も言ってきたらしいけれど、赤ん坊の妹を背中におぶりながら、汽車のキップを手に入れるためには、朝から何度も並ばなければならない戦時下で、母の苦勞も想像できる……。

そんな最中の空襲だったから、もう一刻の猶予もならず、お尻に火のついた母は翌日から疎開の荷造り準備にかかり、7月に入った2日に子供3人連れて下関を立ったという。ところがその夜、第二の空爆が下関と門司を焼き尽くしたのです。その事をラジオで知った母は、被災に遭った方々には申し訳ありませんが、我身の幸運さを感謝したらしい。

そんな内地でも戦地でも、生死を分つ戦時下だけれど、高射砲隊だった短気で勝気で我儘な父の注文には、さすが従順な母もマイッタ！という。幼子を3人抱えて旅館までやっているのに、3日に1回手紙を出せだの、時々『おはぎ』を作って面会に来いだの、無理難題！。心の中では『いいかげんにしろよな』と思ったらしい。

子供の私には夫婦のことなど解けるはずもないが、今となって考えてみると、美男美女の父母だったから、どうやらヤキモチ半分の『愛してる』ついでに、上官や仲間におはぎと妻子を自慢したかったようだ。食糧難で、砂糖も小豆も配給の貴重品でしたが、旅館業には特別割当

があったみたいです。

なにしろ夏場で、あの防空頭巾をかぶった背には赤ん坊、両手にはどっさりのオムツと水とおはぎの入った重箱。5 kmも10 kmもの道程を歩く。幼い2人の子供を気にしながらの面会は、つかの間の嬉しさよりも、口に出せないつらい旅だったろうと、今更ながら母の強さと健気さを思います。

疎開先の祖母は果樹園をやっていて、天理教を信じ、働き者でとても優しいおばあちゃんでした。3人の姉弟は、無邪気にナシの木の蟬を追って遊び暮れているうちに、家が気になった母は弟だけを祖母に託して、再び焦土と化した下関へ戻ったのですが、今度も運強く家は焼けてなかった代り、父の兄宅が焼け出されたので、同居を求めて来ていた。

それから暫くして、広島と長崎に原子爆弾が投下され、そのあまりの脅威に蒼くなった日本は米国に降伏し、昭和20年8月15日に終戦を迎えた。

9月になって、鹿児島島の戦地から復員したそれからの父は、人の3倍も働いて自転車店を興し、戦後の電化製品もほとんどない時代に、テレビ、電気洗濯機やミシンなどを母への感謝にプレゼントしたそうで、お蔭様で恵まれた暮らしをさせてもらいました。

まだまだ、戦場の父から母への『お世辞ラブレター』を父の眼前で破り捨てた話や、台風の中面に会を強行し、崖くずれで途中の農家に一泊一飯お世話になった事など、エピソードは次々と出てくるみたいですが、この記録は母との共同陳述によるものです。

最後に、戦死された御英霊に安らかなることを心からお祈りしてペンを置きます。